

万葉集における植物詠とその表象

大阪芸術大学 文芸学科 教授 龍本那津子

古来、人々は植物を題材として数多くの歌を詠んできた。花の美しさ、四季の移ろいを詠むだけでなく、喜びや悲しみ、恋心などさまざまな感情を植物に寄せて表現してきたのである。また、植物との関わり方も「みる・見せる」「折る」「刈る」「植える」「挿す」など、様々である。

本稿では、こうした和歌における人と植物の関係性、および歌における植物の表象についてたどりながら、特に「万葉集」と「古今集」における「植物詠」の比較を通して和歌の喩にジェンダー性が成立する過程について考えたい。

なお、万葉集に詠まれる植物および植生については、七海絵里香・森崎翔太・大澤啓志による先行研究(注1)を参考にした。これは万葉集およびその後の勅撰和歌集(古今集・後撰集・拾遺集・後拾遺集・金葉集・詞花集・千載集・新古今和歌集)を対象とし、「奈良時代」「平安時代初期」「平安時代中期」「平安時代後期」の四つの時代区分を設けて、和歌に詠まれる植物とそれに対する行為を統計的に分析したものである。

万葉集において、植物を読んだ歌は1650首、そこに詠まれている植物は157種類に上る。もちろんそのすべての植物について網羅的に考察するのは不可能なので、万葉集とその後の勅撰和歌集(八代集)を通じて最も多く詠まれる「松」「桜」「梅」「萩」および「もみぢば」「をみなへし」「藤袴」に限定して論を進める。

歌における植物との関わり方としては、おおまかに

1. 「見る・見せる」(視覚的な行為)
2. 「手折る・挿す・植える」等(接触を伴う行為)
3. 譬喩・イメージとしての植物(観念的なもの)

の三つに分類できよう。植物に対する行為のうち最も多いのは、いずれの時代区分においても「見る・見せる」である。特に平安時代中期では最大(32.7%)となる(注2)。これは特に花を含め、植物を視覚的に捉えて和歌を詠むことが多かったためと考えられるが、後述するように、万葉集の時代と古今和歌集以後の時代における「見る」ことの意味は決して同じものではない。また、この「見る」ことの変容こそが本論の要となるものである。

また、七海等の論考では、「植物に対する行為」の中で「その他」に分類されるもののうち、奈良時代では「挿す(主に髪に植物を挿す)」の割合が平安時代よりも高く、また「その他」には「貫く(実などを紐に通して首飾りにする)」「身につける」「染める」「纏にする(髪飾りにする)」等も含まれることから、特に奈良時代は身を飾る素材として日常的に植物を用いていたと考えている。では、なぜこのように万葉集の時代の人々は「身につける」ものとして接触的に植物と関わっていたのか。

ひとつには、詠み手の生活様式の違いが考えられよう。万葉集には皇族や貴族のみならず、様々な階層の人々の歌が収録されているのに対し、王朝和歌の詠み手である平安貴族たちは、ある程度均質化された都市生活者である。自然に対する関わり方も当然違ってい

たと考えられよう。しかし、ここで忘れてはならないのは、上代の人々に固有の思考である。

土橋寛(注3)は古代歌謡の研究を通して、植物を手にとること、それを揺り動かすことは「タマフリ」(「たましひを振をこす」)すなわち生命力を強化することであると説く。したがって花や青葉を髪に挿すことや植物で衣を染めることもまた同様に、植物の生命力を取り込む行為である。先に挙げた接触的な植物との関わりについては、それがもともとは植物の生命力を取り込む行為であったと考えられる。

さらに土橋は「見ること」もまた「タマフリ」の意味を持つものであった、という。

花や青葉は必ずしも身につけなくても、「見る」ことによっても、同じ呪術的效果があると信じられており、「花見」もまた「タマフリの意義」を持つものであったとする(注4)。

もっとも、こうした感染呪術的な行為であった「植物を身につける」行為は、だんだんとその呪術的な意味を失い、平城京遷都以降は風流を楽しむ美的な行為へと変化していく。花を「見る」行為も同様に「花を愛でる」美的な行為へと becoming していく。

万葉集の最終編者である大伴家持の歌

天平勝宝二年三月一日の暮に、春苑桃李の花を眺
して作る二首歌

春の園紅にほふ桃の花下照る道に出で立つ娘子
(巻十九 4139)

我が園の李の花か庭に散るはだれのいまだ残り
たるかも(巻十九 4140)

は、中国詩文に頻出する「桃李」を対にして配置し、4139番歌は正倉院御物の「鳥毛立女屏風」を思わせる樹下美人の構図である。題詞には「眺矚」(＝眺める)とあっても、実景というよりは中国の詩的感興に裏打ちされたイメージの世界とみるべきであろう。ここにおいて、「花を見る」ことはすでに古代的な呪術的思考からは遠く離れている。

「見る」ことの変容はそれだけではない。佐竹昭広は万葉集には「〇〇見ゆ」という表現が数多くみられることから、上代の人々は存在を視覚によって把握する「視覚優位」の世界であったことを論じた(注5)。万葉集には「香り」を詠んだ歌は極めて少なく、梅を詠んだ歌においても大半はその色(白梅)を愛でるもので、香を詠んだものは一首のみである。ところが古今集以降、梅花は香を愛でるものとなる。ここには万葉集とは明らかに違う思考の世界がある。

1 七海絵里香・森崎翔太・大澤啓志「万葉集および平安期の勅撰和歌集にみる植物に対する行為」(日本緑化工学会誌, 第39巻1号, 2013)

2 同上

3 土橋寛『古代歌謡と儀礼の研究』(岩波書店, 1965)

4 同上

5 佐竹昭広「見ゆの世界」(初出「日本古典文学全集」『万葉集』二, 小学館, 1972)